



セネガルの子どもたちに教育を！

# バオバブの会 ニュースレター

2015年 No.5  
(通巻42号)  
12月20日発行



2015年も残りわずかとなり、皆様方には何かとお忙しくお過ごしのことと思います。  
今年度最後のニュースレターは、秋のイベント報告を中心にお届けいたします。  
お陰様で、バオバブの会は、今年度も多彩な活動を展開することができました。  
様々な形でのご支援、ご協力、本当にありがとうございました。  
暖冬とはいえ、天候不順が続いております。  
体調に気をつけられ、お元気で新年をお迎えください。

## 活 動 報 告

\*\* 「よこはま国際フェスタ2015」 \*\* <http://yokohama-c-festa.org/>

日時：2015年10月10日（土）・11日（日）10：30～16：00

会場：象の鼻パーク

主催：よこはま国際協力・国際交流プラットフォーム運営委員会  
よこはま国際フェスタ2015プロジェクト

国際協力や在住外国人支援に取り組む諸団体が参加した恒例のこのフェスタに、バオバブの会は今年も食販と物販で参加しました。

メニューはおなじみヤーサ（レモンの酸味がきいたチキン・シチュー）とマーフェ（ピーナッツソースのビーフ・シチュー）のサンドイッチに、揚げたてベニエ、そしてセネガルのミントティー「アターヤ」（2日目のみ）。販売開始前から鍋の前で待ちかまえるお客さんがいたほど、煮込み料理は大人気。ベニエも揚げるのが追いつかないほどの売れ行きでした。

2日間とも多くの方たちに訪れていただき、行列のできるブースとなりました。

（文：柳田）

## \*\* 「運動会プロジェクト」 \*\*

「日本の運動会はスポーツだけのイベントではない。保護者や地域社会も一体となって行われるところが素晴らしい」

自身の子どもたちの運動会を通して常々そう感じてきたディウフ会長の発案で、日本の運動会をセネガルに紹介しようというプロジェクトがスタートしました。名付けて「運動会プロジェクト」です。

ご協力いただいたのは、横浜市南区にある市立大岡小学校。運動会におけるお父さん、お母さんたちのボランティア活動も活発で、近隣の商店街の協力態勢も整っており、まさにこの「運動会プロジェクト」の意図するところに最適な小学校です。

10月3日、さっそく撮影にうかがいました。綱引きやダンスといった日本の運動会ならではの各プログラムをメインに、準備の様子、応援の様子、保健係などの役割を担った子どもたちをビデオと写真に収め、PTA会長や校長先生のインタビューも収録させていただきました。

撮影した素材は、今後、DVDや写真集にまとめ、セネガルの先生方や学校関係者に送ります。

(文：柳田)



**\*\* バオバブの会主催イベント \*\***

「バオバブの会チャリティーライブ2015」 ～セネガルの子どもたちに教育を～

日時：11月29日（日）開場14：00 開演14：30（～16：00）

会場：アフリカンレストラン カラバッシュ

セネガル人ミュージシャンのオマール・ゲンデファルさん率いるアフロベゲバンド（ボガ・ンジヤイ・ローズさんも急遽友情出演！）と、ディウフ会長が名付け親のアフリカンゴスペルグループのドームウェイ（＜歌の種＞という意味）を迎えて、バオバブの会主催の初のチャリティーライブを開催いたしました。

来場者はみるみるうちに70人を超え、なんと！在日セネガル大使にもお越しいただき、終始、にぎやかでアットホームな雰囲気のライブとなりました。特にアフロベゲバンドの演奏のクライマックスは、渦巻くアフリカングループの中、皆さんでダンス！ダンス！ダンス！という最高のひと時でした。

これだけたくさんの方達に来ていただけたのも、バオバブの会をいつも応援しサポートして下さる（今、読んでくださっている）皆様、ご自身のライブやイベントを通して宣伝して下さったオマールさんとアフロベゲバンド、アフリカルチャーさん、ドームウェイ、そして、バオバブの会ゆかりの青年海外協力隊OBOGの方々・・・のおかげに他ならないと強く感じております。

今回のチャリティーライブで皆様から頂いた励ましと収益は、来年度からの支援の大きな力となります。心より感謝申し上げます。 （文：田口）



## ★★★★ ことわざで開く、アフリカ文化の窓 ★★★★★

### 第18回 世界はどこへ？

エル・ハッジ・マサンバ ディウフ

(訳・文責 水野)

世界の危険度が高まっています。テロはますますその数と残虐さを増し、紛争は増加し、またしばしば国境を越えて拡がるために、より複雑なものとなってきました。従って、これらの解決は、武力によっても対話によっても困難なばかりか不可能となり、攻撃と反撃の連鎖を断ち切ることができません。このような状況の中で、今、私たちは考えるべきではないでしょうか。「世界はどこへいくのか？」と。

私たちの社会の未来は、どうなるのでしょうか？

私たちの生きる目的が幸福の追求にあり、それは平和、それも正義を伴う平和がなければ達成できないものだとしたら、私たちは本当に正しい方向に向かっているのでしょうか？

もしそうでなければ、方向を変える必要があるのではないのでしょうか？

そして、それはどのように？

セネガルではこう言われています。「冒険の途中で道に迷ったら、出発したところへ戻ればよい」

私たちの歩みの中にこの助言を当てはめようとするならば、歴史を振り返り、どこから、どうやって、ここまでやってきたのかを考えなければなりません。それによって、誤りに気づき、行動を変えることができるからです。

人はそれぞれ独自の視点を持っています。ですから、この問題についても、歴史家、法学者、社会学者、外交官等々といった専門家さえ、意見が一致することはまずありません。

ささやかながら、私にも私なりの見方があります。それは、現在の世界の危険な状況の責任は、第一に欧米の列強にあるのではないかと、いうものです。そして、彼らは、同時に、現在のさまざまな危険、テロや難民問題の第一の犠牲者となっています。セネガルの代表的な民族語であるウォロフ語のことわざ、「お前が喉を引き裂いたものの血は、お前の手だけを汚す」のように。

しかし、実は、このことわざは間違っています。この地球の上で暮らす私たちは、互いに繋がっていて、共に生きるように定められていますので、同じウォロフの人々の別のことわざ、「災いの犠牲者は、それを起こした人だけではない」のほうが正しいのです。ですから、災いの火を消す責任も、そこに住むすべての人々に、また、「助けて！」という叫びを聞いたすべての人々にある、と言えるのです。

さて、ではなぜ、欧米の列強が、現在の危険に満ちた世界の第一の責任者となるのでしょうか？ 彼らは、自分たちの物質的な幸福を迫及する過程で、正直や公正といった社会倫理を守ることがほとんどありませんでした。激しい消費の要求に応えるために、自然資源と人間と金融資産をむさぼってきました。この貪欲な資源の追求は、遂に2つの悲惨な世界大戦と、＜冷戦＞と呼ばれるが、事

実は残酷さにおいて先の2つに劣らない3回目の戦争を生みました。これらの戦争の目的は、欧米の豊かな国々で世界を分け合う、というところにありました。他の国々に、その国の人々の利益や意志に反してでも、自分たちの言うなりに動く指導者や体制を押し付け、抵抗する指導者を暗殺し、都合の悪い体制を覆して。

一例をあげましょう。

アメリカ合衆国は、カスピ海の天然ガス採掘のためのパイプラインを、トルクメニスタンからアフガニスタンを通してパキスタンまで建設しようとしたとき、タリバンと友好関係を結びました。当時、アフガニスタンでは、タリバンと共に、ウサマ・ビン・ラーディンが、ソ連の侵攻に対抗するために、民兵を集め、訓練をしていました。アメリカは、このビン・ラーディン率いる民兵、ムジャーヒディーンに対して、3,300,000ドルに上る資金提供までしたのです。ムジャーヒディーンは、アラブ世界の国々から波のようにやってきた青年たちによって構成されていました。これら職も未来への展望もない若者たちは、ロシア人の<異教徒>たちからアフガニスタンを守るという大義の中に、自分たちの生きる道を見出していました。そして、彼らは、ソ連を退却させることに成功したのです。

ところで、ソ連侵攻を防ぐという使命は、中東に於いてアメリカ合衆国と最も強い友好関係にあるサウジアラビアによって、ビン・ラーディンに与えられたものでした。ところが、不幸なことに、その後、ビン・ラーディンとサウジアラビアとの関係は悪化しました。サダム・フセイン率いるイラクがクウェートに侵入したとき、サウジアラビアは脅威を感じました。なぜなら、サウジアラビアはイラクと長い国境で接していますし、フセインの動きには油断できないところがあったからです。サウジアラビアは、もしイラクが攻撃してきたら自分の兵士たちを使うというビン・ラーディンの申し出を受け入れる代わりに、アメリカ軍にサウジアラビア国内のひとつの基地を提供するほうを選びました。すると、ビン・ラーディンは、聖地がアメリカ人の<異教徒>によって穢されると、サウジアラビアを非難しました。これが、2001年9月11日のニューヨークのワールド・トレードセンタービルの破壊に代表される、ビン・ラーディンの世界ジハードの始まりでした。

したがって、ビン・ラーディンを創り出したのはアメリカ合衆国だと言うことさえできるわけです。そして、そのビン・ラーディンの思想があちらこちらで蘇ったものがアルカイダであり、そこからさらにステップアップしたものがIS、いわゆるイスラム国なのです。私は、このステップアップには、一方ではアメリカとイギリスが、他方ではフランスが、それとは知らずに大きな役割を果たしたのだと考えています。それは、アメリカとイギリスがサダム・フセインを倒し、フランスがリビアのカダフィを排除したという事実によっています。

欧米の列強は、自分たちにとって都合の悪い体制や指導者を追い払うために、軍事クーデターを組織するか、反体制勢力にテコ入れするかを常としてきました。しかし、フセインとカダフィには反体制勢力が存在していませんでした。あるとしても、みな国外で、しかも厳重な監視下にありました。フセインとカダフィは、強力な軍隊を率い、恐怖で人心を掌握し、完全な独裁体制を打ち建てていたのです。

そこで、アメリカ合衆国とイギリスは、フセインを倒すために、彼が、大量破壊兵器を保持していると非難しました。そして、彼らは<世界の警察>を自任しているので、その大量破壊兵器は世界のすべての国々を危険にさらす恐れがある、という理由だけで、国連に代表される世界の声を聞

かずに、一国の指導者を倒そうとすることができたのです。セネガルで、「力は正義を打ち負かす」と言われているように。

結果はご存じのとおり。フセインのもとからは、何らの大量破壊兵器も発見されませんでした。ああ、ありました！ アメリカとイギリスが作ったものだけが。フセイン打倒の後、イラクは混沌とした状況、完全な無政府状態となりました。そして、フセインの武器庫の大部分は、イスラム国の手に渡りました。兵器だけではなく。イスラム国の軍隊には、かつてのフセインの兵士たちが加わりました。その後、イスラム国はイラク北部とシリアの一部を占領し、さらに拡大を続けています。

一方、フランスは、まったく同じことをリビアで行いました。60年代にアフリカで起こったほぼすべてのクーデターを組織し、ザイールのモブツ、中央アフリカのボカサ、といった残虐非道な独裁者を支援したフランスが、カダフィを、彼の国民の一部を虐殺したとして非難し、排除に向かいました注1。そして、近代史上初めて、まず外交による解決を試みることなしに、他国の破壊に走るという暴挙に出ました。フランスのことわざ、「犬を殺すには、その犬が狂犬病だと言うだけでよい」のとおり。そして、その結果もイラクと同じになりました。リビアはもはや国家の体をなさず、イスラム国がかつてのカダフィの武器庫の一部を掌握し、兵士たちを傘下に入れ、勢力を拡大しています。

これらすべてのおかげで、イスラム国は、現在、シリアで猛威をふるっています。そして、彼らの大量殺戮から逃れようと、大勢の人々が難民となって国境を越えていくようになりました。すると、とりわけ欧米諸国が、難民の流入に警告を鳴らし注2、その波を食い止めようと会議を繰り返しています。欧米には、何十年も前から、貧困や気候変動のために主としてアフリカから移民としてやってきた人々がいるのですが、そこに難民の波が加わったので、欧米諸国の指導者は、誰を受け入れて守るか、誰を追い返すかの選択にやっきとなっています。

<多くの人々を、長い間、騙しとおすことはできない>とされています。情報技術の発達により、人里離れたところに住んでいても、様々な言語で発信されるテレビやラジオを見聞きすることができるようになりました。その結果、欧米の列強の不正行為、陰謀、不道徳、そればかりか、犯罪ともいえる様々な行為が、世界中の人々に知られるようになりました。そして、欧米の列強は、地球上に、友人よりも多くの敵を作っています。ですから、「お前が喉を引き裂いたものの血は、お前の手を汚すだけでなく、まわりにまで飛び散っていく」となるのです。世界中が被害をこうむり、誰も逃れることができません。

欧米の列強が幸福を追求すること自体は、非難できません。より多くのものを欲するというのも、人間として自然な行為です。自分の幸福を見つけ守ろうとするための行動は当然の権利だ、ということにも賛成します。しかし、そのためにはどんな手段をとっても、また、何を犠牲にしてもいいとは言えません。とりわけ、それが他の人々の不幸を引き起こすことになるのは、大きな過ちです。

国というのは、他からの攻撃や搾取、また単に余計な干渉がなければ、自分たちで何とかやって

いけるものなのです。なぜなら、誰の中にも生存本能があり、生活をより良くしていこうという望みがあるからです。そして、やがて、彼らは、より住み易い世界を作るのに貢献することもできるのです。かつては豊かで平和な国であったのに、他国のおかげで悲惨な状態に陥ったまま、そこから抜け出せない国の例は枚挙にいとまがありません。

豊かな国がたくさんあるということは、少ししかないよりも良いことです。また、豊かな国が少ししかなく、貧しい国がたくさんあるよりも、ずうっと良いことです。子どもがみんな働くことができれば、その家族は繁栄するのですから。

ですから、

人々が、〈地球はその上で暮らす、すべての人々のもの〉ということを理解するとき、

人々が、〈国境、またパスポートのシステムは、人々の基本的人権を尊重する中で人々の移動を整理するために作りだされたもので、移動を阻むためのものではない〉ということを理解するとき、

人々が、〈共同体が、たとえ、言語、文化、宗教、民族、肌の色、国籍、性、年齢といった多様なカテゴリーで構成されていたとしても、共同体はひとつの同じ家族であり、共に生きるように定められている〉ということを理解するとき、

人々が、〈家族として生きるということは、幸福の中であれ不幸の中であれ、強いられてであれ、好んでであれ、繋がって生きること〉ということを理解するとき、

人々が、〈私たちの地球の資源は、私たちみんなのものであり、ひとつの家族の中でのように、それらを公平に正しく、みんなが必要を満たすことができるように気を配りながら、分け合わなければならない〉ということを理解し、受け入れるとき、

人々が、〈家族のひとりが、連帯、真摯な愛、共感、配慮といった言葉でも呼ばれる家族の団結を破ることなく、みんなのものである財産をひとりじめすることはできない〉ということを理解するとき、

人々が、〈この団結とこの愛だけが、みんなの安全を保障することができ、それらなしでは、誰も、恒久的な安全を望むことはできない〉ということを理解するとき、

人々が、〈人は、飢えると、自分を抑えることができなくなり、彼にとって、守るべき法も国境もなくなってしまう〉いうことを理解するとき、

人々が、〈人は酷い屈辱を受けると、人間であることをやめてしまい、その結果、道徳も愛も分別もなくなり、すべての共同体にとって、真の危険になる〉ということを理解するとき、

人々が、〈私たちの星、地球はとても狭いので、誰であっても、危険から免れるためにひとり離れていることはできない〉いうことを理解するとき、

さらに、より具体的に言うと、

豊かで強い国々が、貧しい国の犠牲の上に自分たちの利益を守るのをやめるとき、

彼らが、〈正義は、長い時間がかかるだろうが、最後には必ず勝利する〉いうことを理解するとき、

彼らが、貧しい国が発展するのを助けることは、自分たちがより繁栄する好機となり、逆に、貧しい国をもっと貧しくし、または貧しさの極みに捨て置くことは、彼らが享受している幸福への脅



威を生む>ということを理解するとき、

そのときようやく、私たちは、賢く幸福を追及することを始めることができるでしょう。そして、私たちの共同体、世界のために、方向を変える必要を理解することでしょう。

しかし、<そのとき>はまだやってきていないようです。不幸なことに、私には、世界を指導する人々が方向を変えようとしているとは思えません。彼らは彼らの考えとやり方に固執して、歴史に学ぼうともしていないようです。一方の私は、歴史をひも解いて考えれば考えるほど、世界の未来について悲観的になってきます。一介の市民に過ぎない私のほうが、間違った歴史の理解をしていけば良いのですが、はたしてどうなのでしょうか？

**注1** カダフィの打倒については様々な要因が語られています。それについては、次回、お話ししたいと思います。今回は、ひとつだけ、カダフィは<アフリカ合衆国>の初代大統領になることを考えていて、その可能性も十分にあったのだが、欧米諸国、とくにフランスはそれを望んでいなかった、ということだけを書いておきます。

**注2** シリア難民受け入れについての数字が語るのは、十分に彼らを受け入れることができる豊かな国々よりも、貧しく困難な状況にある国々のほうが、より多くの難民を受け入れている、という事実です。すなわち、ドイツは66,845人（2015年1月現在）、フランスは5,035人（2014年12月現在）、イギリスは6,375人（2014年12月現在）、イタリアは2,070人（2014年12月現在）、アメリカ合衆国は121人（2014年4月現在）に対して、イラクは249,463人（2015年8月）、ヨルダンに629,266人（2015年9月）、レバノンに1,113,941人（2015年9月）、トルコは1,938,999人（2015年9月）です。

### バ オ バ ブ の 会

〒240-0052 神奈川県横浜市保土ヶ谷区西谷町993-35

TEL&FAX 045-373-0059 HP:<http://the-baobab.org>

代表 エル・ハッジ・マサンバ ディウフ

#### 寄付振込先:

三菱東京UFJ銀行八重洲通り支店普通口座no.1523673

ゆうちょ銀行振替口座 00200=1 45215